

豊かな自然との共存を旨として これからの野生鳥獣対策を考える

生物多様性保全ネットワーク新潟

諸橋 潔・井上 信夫

How to live together with the Natural animals

Biodiversity Network Niigata

Kiyoshi Morohashi and Nobuo Inoue

シンポジウム「豊かな自然との共存を旨として これからの野生鳥獣対策を考える」は、2008年11月2日～3日、野生鳥獣被害が頻発している新潟県南魚沼地区を会場に開催された。1日目は、野生鳥獣の専門家や活動団体による講演とパネルディスカッション、2日目は野生鳥獣の出没現場で研修会を行った。この活動は、地元環境NGO等の協力を得て、「生物多様性保全ネットワーク新潟」が主幹団体となって開催したものである

1. 開催趣旨

全国各地で野生鳥獣が人里に出没し、農業被害や人的被害が多発しているが、新潟県南魚沼地域では2年連続してツキノワグマによる人身事故が発生した。数年前から定着しはじめたイノシシによる農業被害は増加を続けており、ニホンザルは農地や住宅地にまで出没している。カワウによる川魚や養殖魚の食害問題もおきている。奥山や里山の荒廃、中山間地の過疎化などによって、問題は深刻化の一途をたどっている。

一方、四国・九州・中国地方で個体群の消滅が危惧されているツキノワグマは、2006年には新潟県内でも500頭以上が捕獲され、絶滅に向かうのではないかと心配する声も聞かれる。

本シンポジウムでは、人的被害や農業被害を防ぎながら、野生動物と共存していくために、これからの野生鳥獣対策はどうあるべきか、専門家の助言を仰ぎながら、現場からの視点で語り合うことを目的として開催した。

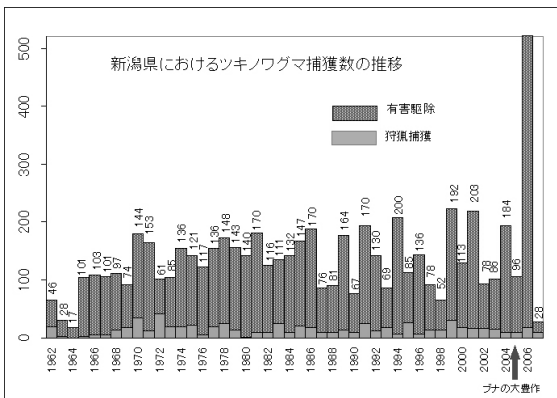


図1 新潟県におけるツキノワグマ捕獲数の推移

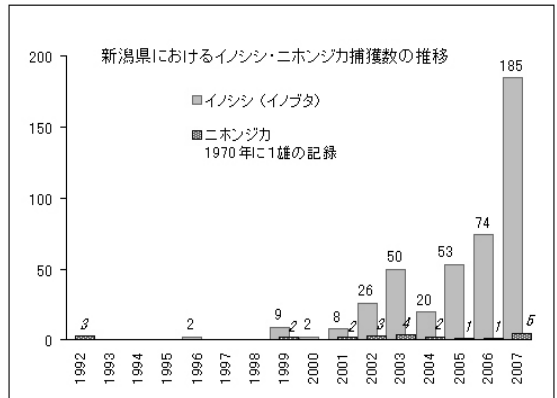


図2 新潟県におけるイノシシ・ニホンザル捕獲数の推移

2. シンポジウムの概要

(1) 基調講演（長岡技術科学大学 山本麻希氏）

【演題：大型野生鳥獣とどう向きあっていくか】
～効果的な管理・防除にむけて～

新潟県内でのサル被害防除は、不十分な体制のまま駆除を中心とした対策が先行しており、生態調査データが不足している。サルやカワウでは、駆除活動によって群れの分散を引き起こし、結果的に被害を拡大しており、駆除だけに偏らない対策が必要である。県内には多数のクマが生息し、現実には被害がおきているにもかかわらず、対策が著しく立ち後れている。

野生動物と軋轢を生じている原因は、もともと人間活動の変化に由来するもので、生息環境の悪化や里山管理能力の低下、狩猟者の減少などが複合的に影響している。不十分な農作物管理が、結果的に野生鳥獣に高栄養の食糧を提供してしまい、人里への出没と急激な増加を招く原因の一つともなっている。

(2) パネルディスカッション

【第1部：現場からの報告】

地元南魚沼市、湯沢町の担当者からは、市街地が山地に隣接していることもあり、人里にやって来たクマによる人身事故が発生、サルによる深刻な農業被害が頻発しているとの報告があった。

地元猟友会員によれば、人家にやってきたクマに対しては、追い払いなどでは対応しきれないとのこと。ハンターの数は年々減り続け、高齢化も進んでおり、いつまで有害駆除等の出動要請に対応できるのか不安を感じている。

【第2部：鳥獣被害の防止と鳥獣保護】

鳥獣保護の立場から、クマを誘引する餌を減らせば人的被害も減るはずという意見があった。県の鳥獣保護行政担当者によれば、クマの大量捕獲があった翌年は、猟友会から予察駆除を自粛してもらったという。3人の担当職員のうち1.7人分のエネルギーがトキに当てられており、他の鳥獣対策については人的にも財源的にも余裕がないのが実状であるという。

鳥獣保護管理の先進地長野県では、一度、市町村

に委譲したクマの捕獲許可権限を県に取り戻し、一元管理を行っている。1995年にツキノワグマ保護管理計画を策定し、電気柵や誘引物除去、緩衝帯整備などを推奨、「駆除に頼らない効果的な被害防除の普及」を目指している。しかしながら、長野県内では市街地のそばまで生息域を広げているクマもあり、大量出没の年には予定枠を大きく越えた駆除があった。

【第3部：会場との質疑応答】

クマやサルの出没に怯えながら通学する子どもたち、丹精してきた畑を荒らされ、生きがいを失うお年寄りなど、鳥獣被害を受けている地域の厳しい現状が紹介された。行政側からの早急な支援策を望む声が大きかった。

(3) エクスカーション

シンポジウム翌日は、南魚沼市五十沢地区を会場に、地元案内人のガイドで野生鳥獣の出没現場で研修を行った。集落内の柿や栗にクマの爪痕や食痕が、ソバ畑にはイノシシの足跡が残る。

長野県環境保全研究所の岸元氏によれば、夜間にクマと出くわす危険があり、いつ人身被害がおきてもおかしくない状況だという。

帰路の車中から、集落内を歩くサルの群れが目撃され、野生鳥獣と対峙せざるをえない地域の深刻な状況を実感した。

3. 今後の課題

ともすると、鳥獣被害発生地域には「徹底駆除」を求める声上がる一方、都市住民の中からは被害発生地域への配慮を欠いた偏った「動物愛護」の声があがることもある。深刻化する野生鳥獣問題を、被害が顕在化している地方の問題にとどめず、国民的課題とする必要がある。

新潟県の環境基本計画2007～2016では、「施策展開」の部分で、「ニホンザルやツキノワグマなど、農作物への被害等により人とのあつれきが深刻化している鳥獣について、生息状況等の調査を行い、保護管理が必要なものについては、保護管理計画を策定し、適切に管理する」と記されている。しかし、実際にはツキノワグマの生態調査はほとんど実施

されておらず、保護管理計画は全く動き出していない。旧版の環境基本計画にあったイヌワシ保護に至っては、一言も触れられていない。予算も人員も絞られ、しかもその大部分が「トキの野生復帰」に向けられているからである。このままでは、第二第三のトキ=次なる絶滅危惧種が増えかねない状況である。

今後も、野生鳥獣の保護管理に関して問題提起を行うとともに、ブナ・ナラの結実状況調査等の取り組みも検討していきたい。また、県や国の野生鳥獣保護行政に対して、一部の希少種に偏った施策を改め、早急に生息状況調査と保護管理計画を実施に移すよう要求していく必要があると考えている。



写真1 鳥獣シンポジウム1



写真2 鳥獣シンポジウム2



写真3 鳥獣シンポジウム3



写真4 鳥獣シンポジウム4

